名古屋大学
NAGOYA UNIVERSITY

配布先：文部科学記者会、科学記者会、名古屋教育記者会

2026 年 6 月 29 日

報道機関 各位

その能力は「生まれつき」か「育ち」か
“心の発達観”に異文化で共有される二次元構造を確認

【本研究のポイント】

・人々が心的能力[注 1)]の発達をどのように捉えているのかを調査した。
・6カ国の成人を対象に調査した結果、人々は一貫して心的能力を「知覚」と「内省」[注 2)]という二つの次元から捉えていることが明らかになり、この傾向はすべての国で確認された。
・人々は、「知覚」次元の能力を比較的生まれつきのものとして、「内省」次元の能力を比較的経験によって育まれるものとして捉える傾向があった。
・心の概念構造は固定的ではなく、どのような文脈で判断されるかによって変化することも明らかになった。
・本研究は、人々が「心の成長」を理解する際に共有している直感的な枠組みを明らかにし、発達や教育に関する人々の日常的な考え方を理解する手がかりを提供する。

【研究概要】

名古屋大学大学院情報学研究科の孟 憲巍（もう けんい）准教授らの共同研究グループ（就実大学心理学部の小國 龍治 講師、昭和女子大学総合情報学部の仁科 国之 講師、常葉大学保育学部の村上 太郎 准教授、名古屋大学大学院情報学研究科の水野 佑佳 博士前期課程学生、米ラトガース大学心理学部の Jenny Wang 助教）は、人々が心の発達をどのように直感的に捉えているのかを、6 カ国の成人を対象に検討しました。参加者は、「見る」「痛みを感じる」「推論する」「善悪を判断する」など 40 種類の心的能力について、それぞれ人生のどの時期に現れると思うかを複数の質問形式を通して回答しました。その結果、人々の心の発達に関する捉え方には一定の構造がみられ、比較的生まれつきの能力と捉えられる「知覚」次元と、比較的経験によって育まれる能力と捉えられる「内省」次元という二つの次元から構成されることが明らかになりました。この傾向は、日本だけでなく、オーストラリア、メキシコ、南アフリカ、英国、米国でも一貫して確認されました。

人々がある能力の起源や性質をどのように捉えるかによって、子どもへの期待や支援のあり方は変わり得ます。本研究は、親や教育者、研究者が子どもの能力をどのように理解し評価するのか、また社会が人間の成長の可能性をどのように捉えるのかを考える上で、新たな手がかりを提供します。

本研究成果は、国際査読誌『Psychological Science』に 2026 年 6 月 26 日付で掲載されました。また、査読済み著者最終稿は、無料公開されています。

【研究背景】

心がどのように芽生え、どのように発達するのかという問いは、人間理解の中核的なテーマとして古くから関心を集めてきました。心理学や生物学、脳科学の発展によって、知覚、感情、推論などの心的能力の発達過程やメカニズムについての科学的知見は着実に蓄積されつつあります。しかし、人々が直感的に心の発達をどのような順序や構造として理解しているのかは、これまで十分に検討されてきませんでした。

こうした発達観は、研究者が心を調べる際にどのような仮説を立てるか、親が子どもに何を期待するか、教育者がどのような学習環境を整えるか、さらには社会が人間の可能性をどのように捉えるかにも影響し得る重要な認知的基盤です。たとえば、ある能力を「まだ育っていない」と考えるのか、「すでに備わっている」と考えるのかによって、子どもへの関わり方や支援の仕方は変わり得ます。

これまでの研究では、人間、動物、ロボットなど異なる対象がどの程度「心」をもつと見なされるかが調べられ、「身体・マインド（認知）・ハート（感情）」から成る心の概念構造が提案されてきました（Gray et al., 2007; Weisman et al., 2017）。これらの知見は、心理学のみならず、ロボット工学や人工知能研究などにも大きな影響を与えています。

一方で、人々が心の発達そのものをどのように捉えているのか、またその認識の構造が文化を超えて共有されているのかについては、これまで明らかになっていませんでした。

【研究内容】

本研究では、複数の質問形式と文化圏を組み合わせ、一般の人々の「心の発達」に関する直感をデータ駆動的に分析[注 3)]しました。研究1では、日本人成人を対象に、写真選択、年齢範囲の選択、自由回答という異なる形式で、40 種類の心的能力がいつ初めて現れると思うかを尋ねました（図 1 と図 2）。いずれの質問形式でも、探索的因子分析[注 4)]により一貫した二因子構造が確認されました（図 2）。第一因子は、推論する、信念をもつ、自制する、善悪を判断する、誇りを感じるといった、内省や社会的評価を伴う能力でした。研究グループはこれを「内省」次元と名付けました。第二因子は、見る、音を聞く、空腹や痛みを感じる、恐怖を感じるといった、知覚や基本的な経験に関わる能力であり、「知覚」次元と名付けました。

図 1. 各研究で用いた主要な質問項目と選択肢. 研究1および研究3の子どもの写真はイメージ図であり、実際に研究で使用した写真ではない。研究3A は、Weisman ら（2017）のデータを再解析したものである。また、日本の参加者に提示した「胎児」と「ロボット」の写真は、同研究と同一のものを使用した。Meng et al.（2026）をもとに作成。

研究2では、同様の調査をオーストラリア、メキシコ、南アフリカ、英国、米国の成人に拡張しました。二次元構造はすべての国で一貫して確認されました（図 1 と図 2）。一方で、各能力がいつ頃発達すると考えられるかについては、特に「内省」次元の能力において国ごとのばらつきもみられました。

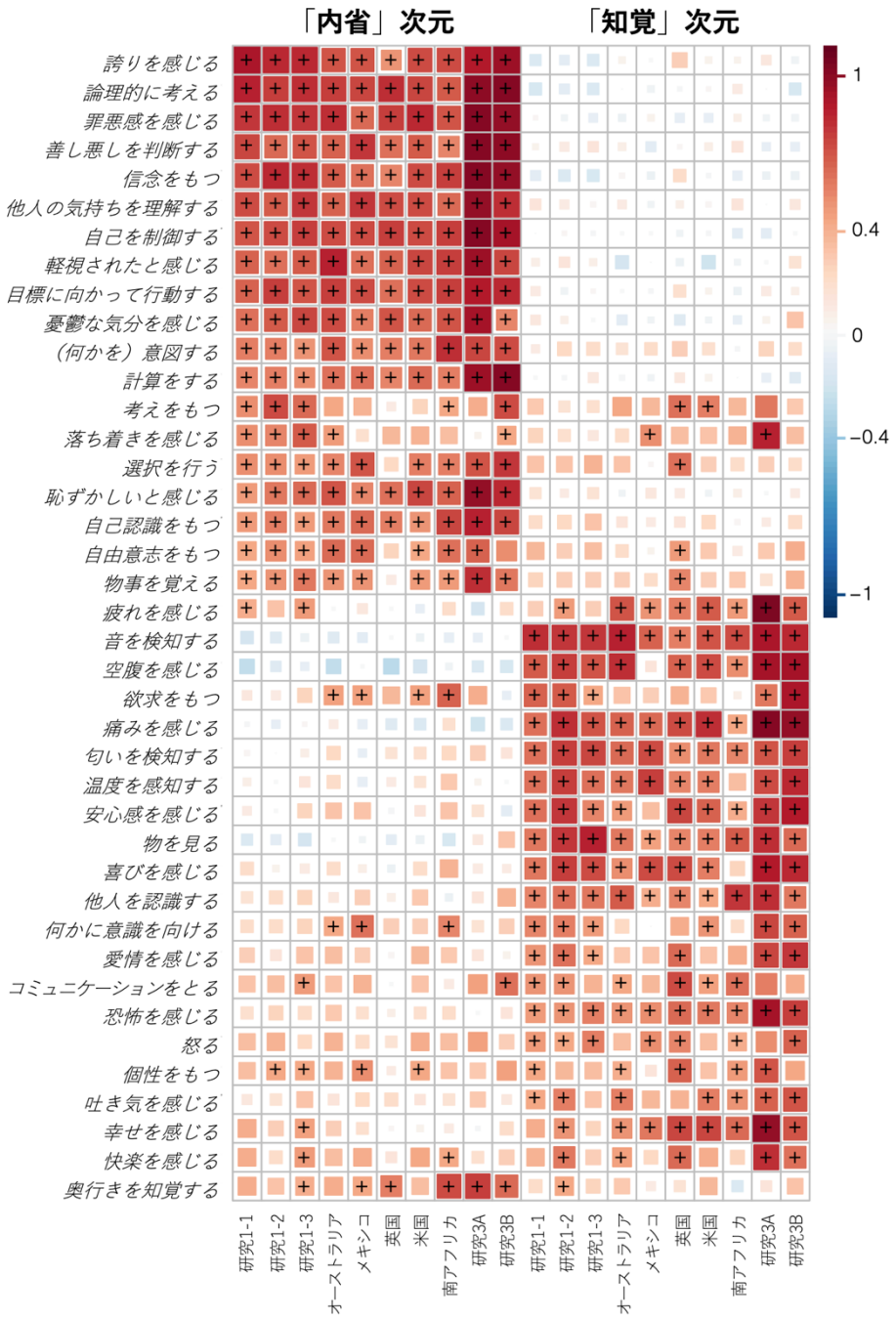

図 2. 人々が考える「心の成長」の二次元構造. 各心的能力について、人々が想定する発達時期に基づく探索的因子分析の因子負。カラーバーの色が濃いほど因子負荷量の絶対値が大きいことを表し、赤は正の負荷量、青は負の負荷量を示す。「＋」は、単一の因子に対して一定以上の負荷量（0.40 以上または−0.40 以下）を示した項目を表す。Meng et al.（2026）をもとに作成。

研究3では、この二次元構造がどのような場面で現れるのかを検討しました（図 1）。胎児、乳児、子ども、大人といった人間の発達段階という文脈の中で参加者の回答を解析した場合には、「知覚」と「内省」の二次元構造が現れました。しかし、ロボットなど非ヒト対象を含めて比較した場合には、従来研究で知られている「身体・マインド（認知）・ハート（感情）」の三次元構造が確認されました。この結果は、心の概念構造が固定的なものではなく、ロボットなども含めて異なる存在同士の心を比較するときと、人間の心がどのように発達するかを検討するときとで異なることを示しています。「心とは何か」という人々の直感的理解が固定的なものではなく、発達について考えるのか、それとも人間とロボット

を比較するのかといった文脈によって変化することを示しています。

研究4では、これらの二つの次元が「生まれつきか、経験によって育つか」という直感とどのように関係するかを検討しました。各能力がどの程度「生まれ」によるものか、あるいは「育ち」によるものかを評定してもらいました（図 1）。その結果、生まれつきと見なされる能力ほど「知覚」次元として、経験によって育つと見なされる能力ほど「内省」次元として分類される傾向が確認されました。これは、人々が心の発達を理解する際に、「生まれつき」と「経験による学習」という古くからの二分法的な発達観を直感的に用いている可能性を示しています。

【成果の意義】

1. 文化を超えて共有される「心の発達観」を発見

本研究は、人々が心の発達を、個別の能力の集合ではなく、一定の構造を有するものとして捉えていることを明らかにしました。また、6カ国で同じ二次元構造が確認されたことは、人々が心の発達を理解する際に、文化を超えて共有された認知的枠組みが存在する可能性を示しています。一方で、特に内省的な能力では文化差や個人差も見られ、社会や言語が心の発達観に影響する可能性も示されました。

2. 心の概念における文脈依存性の証明

本研究は、心的能力を評価する際の文脈によって、人々の心の捉え方の構造が変わることも示しました。人間の発達として考える場合と、人間以外の対象も含めて比較する場合とでは、心を整理する軸が異なります。この知見は、心の知覚や直感心理学の研究に新たな視点を与えるものです。

3. 教育・子育て・社会的期待への示唆

人々がある能力の起源や性質をどのように捉えるかによって、子どもへの期待や支援のあり方は変わり得ます。本研究は、親や教育者が子どもの能力をどのように理解し評価するのか、また社会が人間の成長の可能性をどのように捉えるのかを考える上で、新たな手がかりを提供します。本研究は、人々が心の成長を理解する際に、「知覚」と「内省」という二つの観点から捉える傾向があることを示しました。一方で、こうした見方は実際の心的能力の発達パターンと必ずしも一致しない可能性があります。今後は、人々の発達観と実際の発達との関係をさらに明らかにしていくことが重要です。本研究は、その関係を理解するための重要な手がかりを提供するものです。

【用語説明】

注 1）心的能力：

見る、聞く、痛みを感じる、推論する、信念をもつ、自制するなど、知覚・感情・思考・判断に関わる心の働きや能力の総称。

注2）「知覚」次元と「内省」次元：

論文では、それぞれ「知覚・経験」次元（Perceptual–Experiential Dimension）および「内省・評価」次元（Reflective–Evaluative Dimension）と呼んでいます。本プレスリリースでは、一般読者に分かりやすく伝えるため、「知覚」次元、「内省」次元と簡略化して表記しています。

注3）データ駆動的分析：
研究者の先入観に基づいて分類するのではなく、収集したデータのパターンから構造や特徴を見いだす分析手法。
注4）探索的因子分析：
多数の項目への回答パターンをもとに、それらの背後にある少数の共通因子（共通する特徴や次元）を統計的に推定する分析手法。

【論文情報】
雑誌名：Psychological Science
論文タイトル：How Does the Mind Grow? Cross-Cultural Intuitive Theories of Mental Development
著者：Xianwei Meng, Ryuji Oguni, Kuniyuki Nishina, Taro Murakami, Yuka Mizuno, Jinjing (Jenny) Wang
DOI: 10.1177/09567976261453926
査読済み著者最終稿（出版社による組版前の原稿、無料公開）：
https://osf.io/preprints/psyarxiv/xyt6f_v1

MAKE NEW STANDARDS.
東海国立大学機構
東海国立大学機構は、岐阜大学と名古屋大学を運営する国立大学法人です。
国際的な競争力向上と地域創生への貢献を両輪とした発展を目指します。
東海国立大学機構 HP https://www.thers.ac.jp/